

末永数蔵町遺跡Ⅱ

— 主要地方道福岡早良・大野城線道路拡幅工事に伴う文化財調査報告書 —

前原市文化財調査報告書

第101集

2009

前原市教育委員会



末永数蔵町遺跡Ⅱ

— 主要地方道福岡早良・大野城線道路拡幅工事に伴う文化財調査報告書 —

前原市文化財調査報告書

第101集

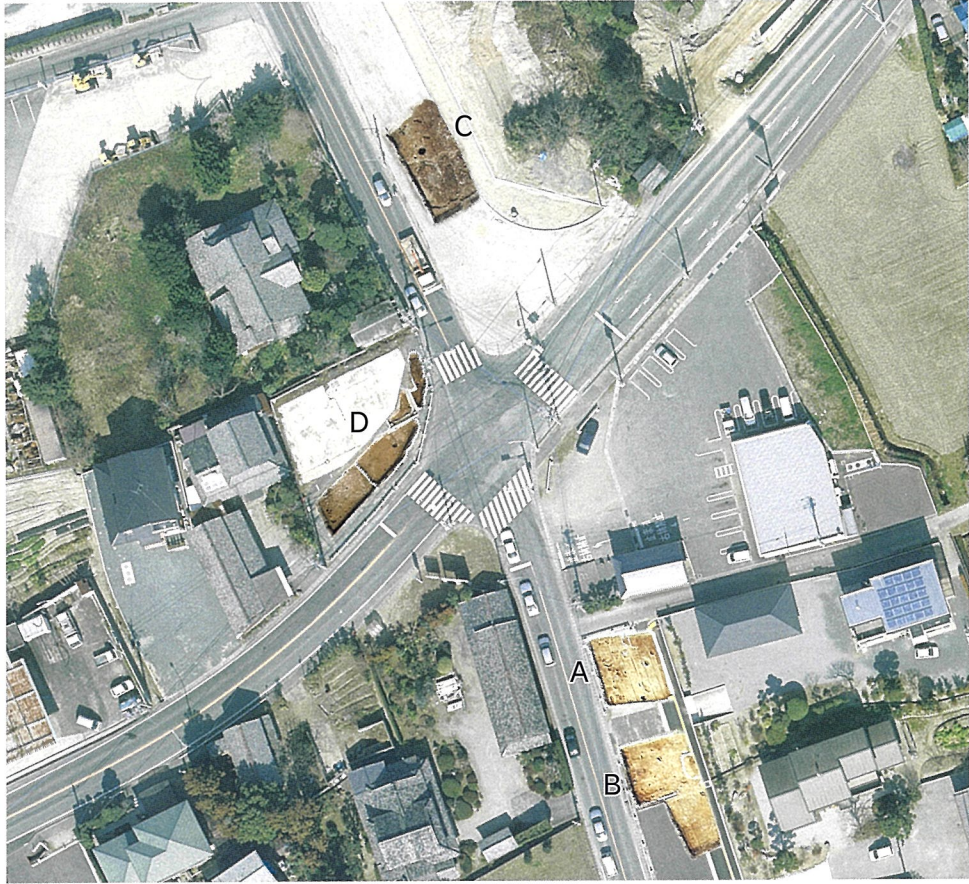
2009

前原市教育委員会



未永数蔵町遺跡・梅木田遺跡全体写真

巻頭図版2-1



末永数蔵町遺跡A～D地区全体写真

巻頭図版2-2



末永梅木田遺跡E～G地区全体写真

序

本書は、県道の道路拡幅工事に先立って行われた埋蔵文化財発掘調査の報告書です。平成18年度に実施された末永数蔵町遺跡の発掘調査に引き続き、平成19年度の調査でも掘立柱建物や便槽などのほか、井戸などが確認され、江戸時代から明治時代にかけての末永村の歴史解明、また、近世以前の前原市東部の様子を伺い知ることのできる貴重な成果をあげることができました。

埋蔵文化財は、地域の歴史を解明するうえで欠かすことのできない遺産です。本書に収録されたこれらの資料が文化財の理解、また文化財保存の一助となるとともに教育普及、学術研究の分野においても活用されれば幸いに存じます。

末筆となりましたが、発掘調査にあたっては周辺住民の方々のご理解とご協力を頂き、報告書作成にあたってはご協力頂いた関係機関、関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成21年3月31日

前原市教育委員会
教育長 中原一憲

例 言

1. 本書は主要地方道福岡早良・大野城線の道路拡幅工事に伴い、平成19年度に前原市教育委員会が行なった発掘調査の記録である。
2. 末永数蔵町遺跡・末永梅木田遺跡は、前原市大字末永に所在し、計584m²にわたって遺構を確認、発掘調査を行なった。
3. 遺構の実測にあたっては、中山健介、鷹見悠介、白石哲也の協力を得、瓜生秀文、福田博右が行なった。
4. 遺構の写真は、空中写真を有限会社空中写真企画に委託し、その他は福田博右が撮影した。
5. 遺物の実測・製図は龍孝明が行ない、藤野さゆりの協力を得た。
6. 陶磁器については遺物の釉が薄く、製図に支障をきたす場合は釉の部分を実測図に表していない。
7. 遺物の写真は龍が撮影した。
8. 本書に掲載した遺構および全体図で使用した座標は国土交通省告示の平面直角座標系に準拠したが、世界測地系ではなく、日本測地系である。方位は磁北であり、水平基準は東京湾平均海水面水準(T.P.)である。
9. 遺物・実測図・写真は伊都国歴史博物館にて保管・管理している。
10. 本書の執筆、編集は龍が行なった。

本文目次

巻頭図版

序文

例言

I. はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
3. 調査の経過	2
II. 位置と環境	3
III. 調査の記録	6
1. 末永数蔵町遺跡 近世・近代の遺構と遺物	6
(1) 埋桶	7
(2) 井戸	8
(3) 埋甕	10
(4) 溝	10
(5) 掘立柱建物	11
(6) 石垣状遺構	12
(7) 焼土坑	13
(8) ピット	14
(9) 石器・鉄器・その他	15
2. 末永梅木田遺跡 近世・近代の遺構と遺物	16
(1) 溝	16
(2) 掘立柱建物	17
(3) ピット	18
3. その他の時代の遺構と遺物	18
(1) 弥生時代の遺構と遺物	18
(2) 古墳時代以降の遺構と遺物	20
IV. まとめ	21

図版

報告書抄録

付図

挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図(1/75,000) ……………	4
第2図	末永遺跡群周辺地形図(1/5,000) ……………	5
第3図	数蔵町遺跡基本層序(1/100) ……………	6
第4図	1号埋桶実測図(1/20) ……………	7
第5図	1号埋桶底板実測図(1/10) ……………	7
第6図	1号埋桶出土遺物実測図(1/3、1/6) ……………	7
第7図	2号埋桶実測図(1/20) ……………	8
第8図	2号埋桶底板実測図(1/10) ……………	8
第9図	1号井戸実測図(1/40) ……………	9
第10図	1号井戸出土遺物実測図(1/3) ……………	9
第11図	埋甕実測図(1/20) ……………	10
第12図	埋甕出土遺物実測図(1/4) ……………	10
第13図	1～3号溝出土遺物実測図(1/3) ……………	11
第14図	1号掘立柱建物実測図(1/40) ……………	11
第15図	柱穴出土遺物実測図(1/3) ……………	12
第16図	石垣状遺構出土遺物実測図(1/3) ……………	12
第17図	石垣状遺構実測図(1/30) ……………	12
第18図	焼土坑実測図(1/20) ……………	13
第19図	焼土坑出土遺物実測図(1/3) ……………	13
第20図	84・98・52・13号ピット出土遺物実測図 (1/3、1/4) ……………	14
第21図	石器・鉄器・その他出土遺物実測図 (1/2、1/3) ……………	15
第22図	6号溝実測図(1/60) ……………	17
第23図	1号掘立柱建物実測図(1/40) ……………	17
第24図	2号掘立柱建物実測図(1/40) ……………	17
第25図	208・168号ピット出土遺物実測図(1/3、1/4) ……………	18
第26図	末永数蔵町・梅木田遺跡出土弥生土器実測 図(1/3、1/4) ……………	19
第27図	末永数蔵町・梅木田遺跡出土須恵器・瓦質 土器実測図(1/3) ……………	20

図版目次

巻頭図版1	末永数蔵町・梅木田遺跡全景
巻頭図版2-1	末永数蔵町遺跡A～D地区全景
巻頭図版2-2	末永梅木田遺跡E～G地区全景
図版1-1	数蔵町遺跡C地区 全体写真(真上から)
図版1-2	数蔵町遺跡D地区 全体写真(真上から)
図版2-1	梅木田遺跡E地区 全体写真(真上から)
図版2-2	梅木田遺跡F地区 全体写真(真上から)
図版2-3	梅木田遺跡G地区 全体写真(真上から)
図版3-1	1号埋桶検出状況
図版3-2	1号埋桶底板検出状況
図版3-3	2号埋桶底板検出状況
図版4-1	1号井戸完掘状況
図版4-2	埋甕完掘状況
図版4-3	焼土坑完掘状況
図版4-4	石垣状遺構完掘状況
図版4-5	梅木田遺跡 1号掘立柱建物 (西から)
図版4-6	6号溝 完掘状況 (西から)
図版5	出土遺物①
図版6	出土遺物②
図版7	出土遺物③
図版8	出土遺物④
付図1	末永数蔵町遺跡C地区全体図
付図2	末永数蔵町遺跡D地区全体図
付図3	末永数蔵町遺跡E地区全体図
付図4	末永数蔵町遺跡F・G地区全体図

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成19年4月17日付けで、福岡県前原土木事務所から前原市大字末永地内の県道拡幅工事(2,839㎡)に関して、埋蔵文化財発掘調査の届出が前原市教育委員会に提出された。

対象地は、川原川の右岸地域にあたる。末永数蔵町遺跡は、平成18年度に調査が行なわれた末永数蔵町遺跡の北約50m、末永梅木田遺跡は南東約400mに位置する。周辺は末永遺跡群の範囲内である。周囲には末永古屋敷遺跡や末永高木遺跡、末永六ノ坪遺跡など弥生時代～中世、近世にかけての重要遺跡が発見されており、周知の埋蔵文化財包蔵地であるとともに埋蔵文化財包蔵地に隣接しているため、事業対象区の確認調査が必要な旨を回答した。

確認調査の結果、埋桶や溝、陶磁器、砥石などが検出され、近世から近代までの遺構・遺物が存在することが確認された。

この確認結果を受けて、福岡県前原土木事務所と本調査の工程協議・調査が行われ、平成19年6月18日に調査委託に関して合意が得られたため、数蔵町地区(394㎡)、梅木田地区(190㎡)の記録保存のため発掘調査を実施することとなった。

2. 調査の組織

平成19、20年度にかけて実施した末永数蔵町・梅木田遺跡の調査組織は以下の通りである。

調査主体 前原市教育委員会

		平成19年度 (調査)	平成20年度 (報告書作成)
総括	教育長	中原一憲	中原一憲
	教育部長	坂巻喜直	坂巻喜直
	文化課長	久保静代	谷口正和
	文化課発掘調査係長	角 浩行	角 浩行
調査	同 主査	瓜生秀文 福田博右(臨時職員)	
報告書作成	同 主事	江崎靖隆 龍 孝明(臨時職員)	

本調査および報告書作成にあたって、下記の方がたのほか、多くの方がたからの御助言、御支援をいただいた。明記して深謝いたします。(敬称略、順不同)

(現場作業員)

山崎チヨコ、平山富士子、藤木和子、川上久美子、米山八重子、市丸千賀子、和多治子、柏田睦子、江藤晴美、川内真知子、中山健介、末松繁光、福井菊雄、瀬知昌夫、江口富美子、浦上良枝、田角節子、加藤優香、綿谷由紀乃、鷹見悠介、白石哲也

(整理作業員)

藤木和子、川上久美子、米山八重子、市丸千賀子、柏田睦子、和多晴子、藤森啓子、名取さつき、田中阿早緑、三嶋弘美、藤野さゆり、波多江聡美、加藤優香、田中裕美、有田麻里江、鷹見悠介、白石哲也

3. 調査の経過

末永数蔵町遺跡・梅木田遺跡の調査は、平成19年7月17日から平成20年1月9日まで実施した。以下、調査経過を調査日誌より抜粋し記す。

平成19年

末永数蔵町遺跡

- 7月17日(火) 重機搬入。表土剥ぎを行なう。
- 8月17日(金) 1号埋桶検出。底板検出。
- 8月20日(月) 埋甕検出。写真撮影を行なう。
- 8月28日(火) 黒色包含層下で遺構検出。遺構面まで掘下げ。
- 9月 7日(金) 空中写真撮影を行なう。
- 9月10日(月) 1号埋桶完掘。
- 9月11日(火) 1号井戸検出。
- 10月 3日(水) 1号井戸完掘。写真撮影を行なう。
- 10月12日(金) 石垣状遺構・焼土坑検出。
- 10月17日(水) 焼土坑完掘。石垣状遺構・焼土坑写真撮影を行なう。
- 10月22日(月) 空中写真撮影。石垣状遺構・焼土坑実測終了。
- 10月24日(木) 重機による現場埋め戻し。調査完了。

末永梅木田遺跡

- 11月 5日(月) 重機搬入。表土剥ぎを行なう。
- 11月16日(金) 5号溝完掘。
- 12月14日(金) 1～4号溝の写真撮影を行なう。
- 12月20日(木) 1/20実測終了。
- 12月21日(金) 空中写真撮影を行なう。
- 1月 9日(水) 重機による現場埋め戻し。調査完了。

II. 位置と環境

末永数蔵町遺跡、末永梅木田遺跡は、前原市大字末永に立地し、前原市東部を北流する瑞梅寺川の支流である川原川の右岸地域、前原市の南東部に位置する。末永地区は、東に高祖山、南に井原山、西は雷山の裾部がのび、三方を山に囲まれた標高60～70mを測る丘陵上に位置する。北は雷山川、瑞梅寺川の二河川により形成された沖積平野が広がる。井原山(標高983m)山麓に源を発する瑞梅寺川は川原川、汐井川といった中小河川と合流しながら、大字三雲・井原付近で扇状地を形成、下流では沖積地を形成しながら今津湾へそそぐ。前原市南東部は、これら堆積によってうまれた肥沃な土壌の純農業地帯となっており、水田、畑地がひろがる。

本遺跡が位置する前原市南東部には三雲・井原遺跡が存在し、三雲南小路遺跡1号、2号甕棺からは異体字銘帯鏡を中心とした中国鏡が多数出土しており、弥生時代中期末の王墓とみられる。井原鎚溝遺跡からは方格規矩鏡など20面ほどの鏡が出土し、弥生時代後期初頭の王墓の存在が想定される。三雲・井原遺跡からさらに西に向かうと平原遺跡1号墓があり、方格規矩鏡を中心とする鏡が40面出土し、直径46.5cmを測る内行花文鏡5面が出土しており、これらは伊都国の王墓とみられる。そのほか弥生時代を通じて甕棺墓、石棺墓、木棺墓、住居などが広範囲に分布している。下西地区の方形環濠、八龍地区の3重環濠なども確認されている。現在でも遺跡範囲の確認調査が継続して行なわれており、これらの調査から徐々に弥生時代における伊都国王都の範囲が明らかになりつつある。

末永遺跡群周辺の前古墳時代の遺跡としては、北西に端山古墳、築山古墳、西に井原1号墳、北に高祖東谷1号墳などが存在する。端山古墳は全長78.5m、後円部径42m。築山古墳は全長約60m、後円部径48mで、いずれも盾形の周濠を持つと考えられる前期の前方後円墳で、怡土平野の首長墳と考えられる。井原1号墳は全長42m、高祖東谷1号墳は全長36mであり、前二者とは一線を画す下位有力者層の古墳と考えられる。

1991年には、末永六の坪遺跡の試掘調査が行なわれ、竪穴住居、4基の甕棺のほか包含層より小型仿製鏡が出土している。末永初田遺跡では弥生中期の遺物包含層、ピット、土坑が確認され、県道大野城・二丈線以南にも弥生時代の遺跡が広範囲にわたって広がることが明らかになっている。

また南側丘陵上では、西堂スケ遺跡で土師器などが出土している。末永備中遺跡A地区では土師器や磁器。末永備中遺跡B地区では火葬土坑、土師器などが出土しており、古墳～中世にいたる遺跡が分布することが確認されている。

末永数蔵町遺跡の東側には、1993年に調査された末永高木遺跡があり、「伊刀郡託」と刻まれた須恵器の大甕片や「前田」と墨書された土師器が出土している。このことから周辺に駅家、もしくは駅家に相当する施設があったことが推測されている。

同時期には高祖山(標高416m)山麓に怡土城が築造されている。『続日本紀』によれば、天平勝宝8(756)年から神護景雲2(768)年までの13年間を費やし築造されたと伝えられる。推定200haを超える広大な山城であるが、現在遺構として確認されているのは約2kmになる土塁、5ヵ所の望楼跡、倉庫跡数棟のみである。

1992年には、末永古屋敷遺跡の発掘調査が行なわれ、堀立柱建物、溝、中世包含層などが検出されるとともに、陶器、磁器、土師皿などが出土している。そのほか天聖元寶、元裕通寶、紹聖元寶などの宋銭が出土しており、中世から近世まで続く集落が確認された。

このように、末永遺跡群の位置する前原市南東部では、弥生時代から近世にいたる遺跡が数多く確認されている。このことは、東に日向峠、南に糸島峠があり、現在の福岡市、佐賀に繋がる交通の要衝である重要な地域であったためであろう。

参考文献

角 浩行編 『川原川右岸地区遺跡群Ⅱ』 1998 前原市文化財調査報告書第65集

江崎靖隆編 『末永数蔵町遺跡』 2008 前原市文化財調査報告書第97集



- 1. 末永数蔵町遺跡 2. 末永梅木田遺跡 3. 末永高木遺跡 4. 末永六の坪遺跡 5. 末永初田遺跡 6. 末永古屋敷遺跡
- 7. 西堂古賀崎古墳 8. 井原1号墳 9. 高祖東谷1号墳 10. 端山古墳 11. 築山古墳 12. 三雲南小路遺跡 13. 井原鎌溝遺跡(推定地) 14. 平原遺跡 15. 上籬子遺跡 16. 志登支石墓群
- A. 三雲・井原遺跡群 B. 怡土城跡

第1図 周辺遺跡分布図



第2図 末永遺跡周辺地形図

Ⅲ. 調査の記録

末永数蔵町遺跡

1. 調査の概要

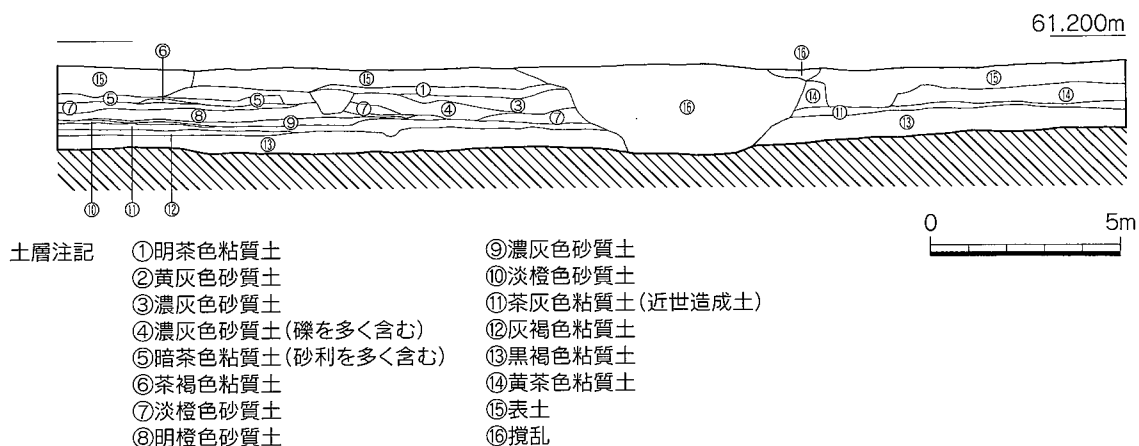
(1) 調査の概要

末永数蔵町遺跡の発掘調査は県道早良・大野城線の道路拡幅工事に伴って行なわれた。遺跡は末永交差点をはさんで、北東と北西に位置する。このため、北東側調査区をC地区、北西側調査区をD地区として調査を行なった。事前の確認調査によってC地区では桶状の曲物が検出されるとともに溝、柱穴が数基検出され、近世・近代の陶磁器が確認された。D地区では石垣が検出されたほか、近世・近代の陶磁器が確認された。このことから、調査が必要であると判断し、発掘調査を実施することとなった。

発掘調査を実施したところ、C地区では大規模な攪乱を受け、D地区では現代建物の基礎が遺跡を大きく破壊していることが明らかとなった。そのため遺構の保存状態は良くなかったものの、C地区では埋桶、埋甕のほか井戸などが検出された。D地区でも石垣状遺構や焼土坑が検出された。また、C・D両地区において多数の柱穴が確認されている。

(2) 基本層序

基本層序は、C地区東壁に設定した土層断面図で示す。遺構面は、南側で現地表から約50cm下、北側では約75cm下で検出された。旧地形は南から北へ緩やかな傾斜をもち、その上に弥生時代の遺物を含む黒褐色の包含層がのる。北側では弥生時代の包含層上に陶磁器を含む近世の包含層がみられるが、南側では検出されない。上面は近世の造成土が薄く堆積し、その上には近・現代の造成土がのる。調査区は大規模な攪乱を受けており、一部は弥生時代の遺物包含層を削平している。



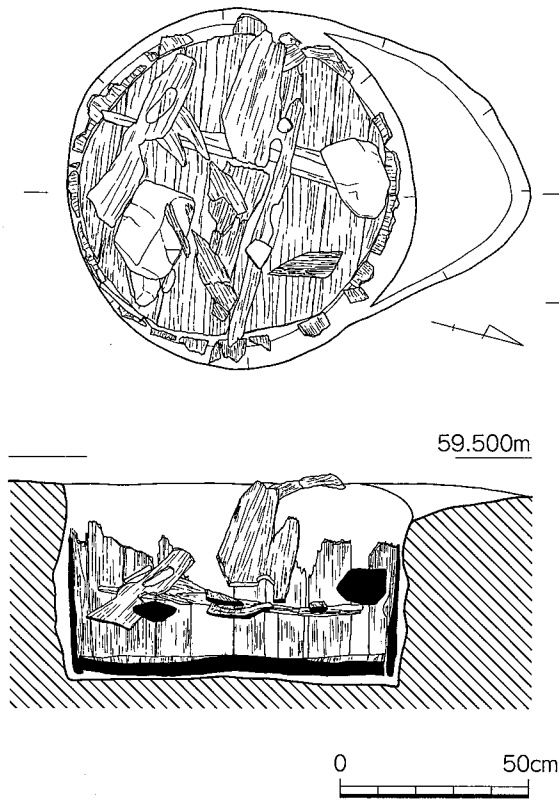
第3図 数蔵町遺跡C地区東壁土層断面図(1/100)

2. 近世・近代の遺構と遺物

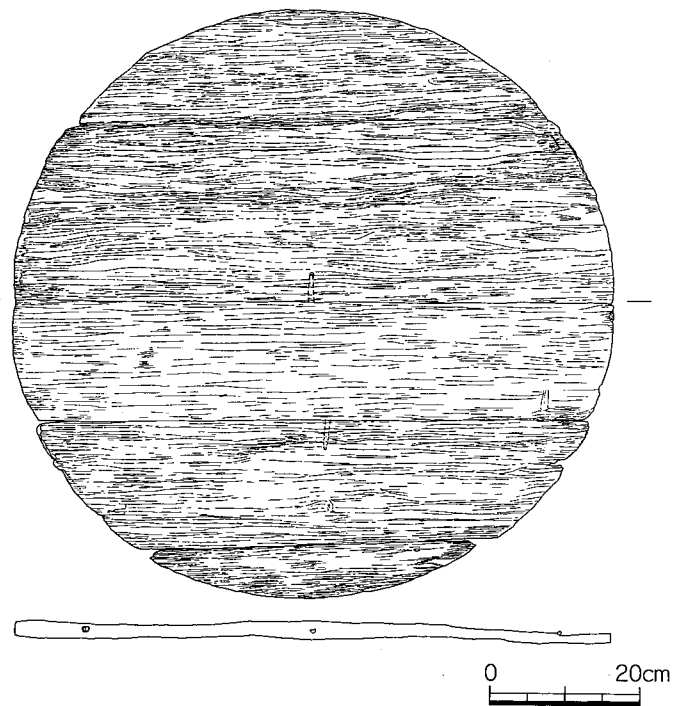
(1) 埋桶

1号埋桶 (第4、5図)

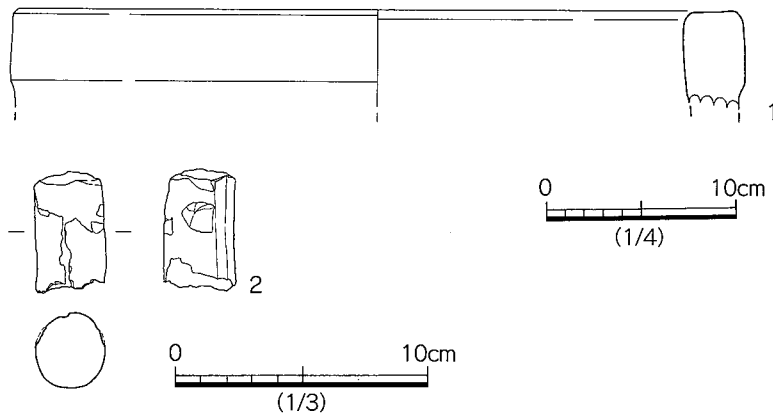
C地区南西側で検出した埋桶である。南北1.23m、東西0.96mの長方形プランの掘り方に桶を埋めている。遺構の深さは48cm、底板までは42cmである。底板は79.5cm×79cmの円形で、5枚の板をそれぞれ3本のツナギ木でつないでいる。遺存状態が悪く、木質のめくれが激しい。厚さは約4cm程である。側板は長さ10~30cm程度残存しているものの、上部が折損していることから、上部は削平されているものと思われる。埋桶式便槽であろう。



第4図 1号埋桶実測図(1/20)



第5図 1号埋桶底板実測図(1/10)



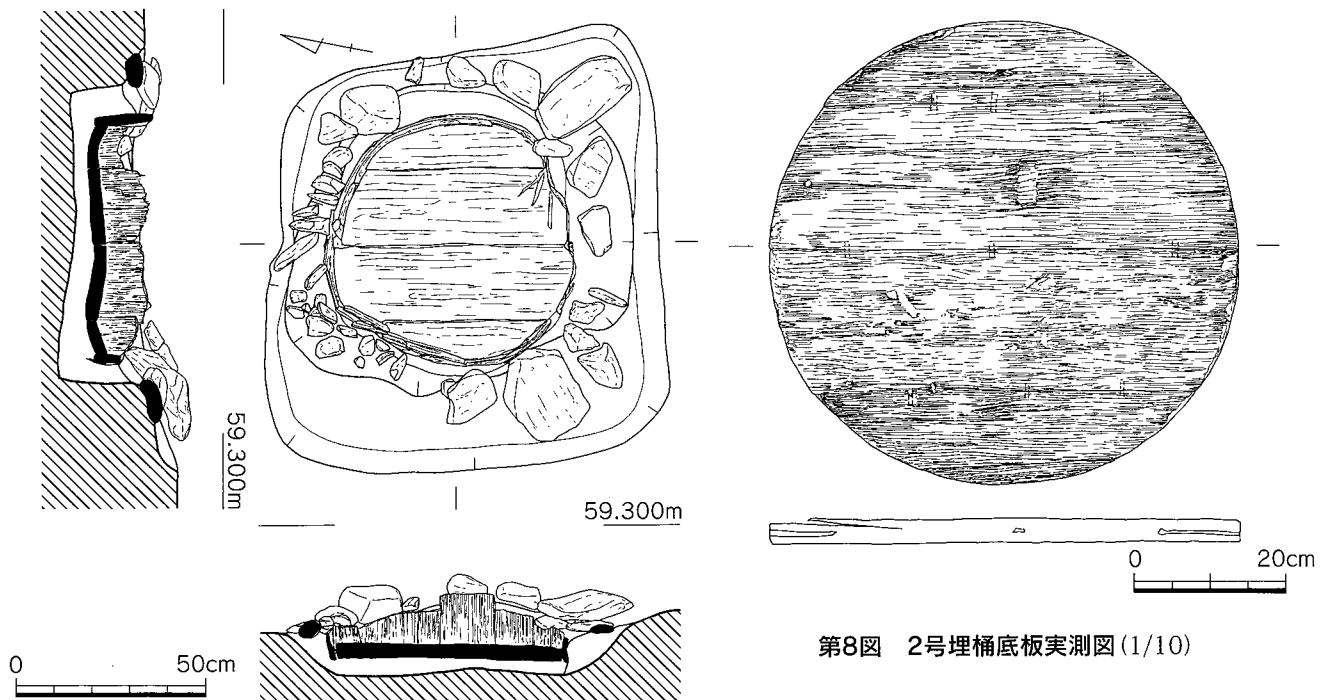
第6図 1号埋桶出土遺物実測図(1/3、1/4)

出土遺物(第6図)

1は甕で口縁部が僅かに残存する。復元口径は約16.5cmで、器壁は約3.2cmを測り、非常に厚い。内外面ともに回転横ナデを施す。2は円柱状の土製品で、直径2.75~3.05cmほどである。両端は折損しており、残存長は4.9cmである。側面の一部をヘラ状工具によって削っている。用途不明。

2号埋桶(第7、8図)

C地区南側で検出された曲物である。3号溝を切る。南北1.65m、東西1.1mの長方形の掘り方に埋められた桶である。深さは現況で18cmほどしか残っていない。遺構上面には15~30cm大の石が配石されており、本来の深さもそれほど変わらないと思われるが、遺構底部の標高は1号埋桶とほとんど変わらず、上部が削平されている可能性もある。底板は61cm×61.8cmの円形で、4枚の板を3~4本のツナギ木でつないでいる。底板の残存状態は比較的良く、厚さは約6.2cmである。遺構が浅いこともあり、埋桶式便槽とするには疑問が残る。また出土遺物も確認されなかった。



第7図 2号埋桶実測図(1/20)

第8図 2号埋桶底板実測図(1/10)

(2) 井戸

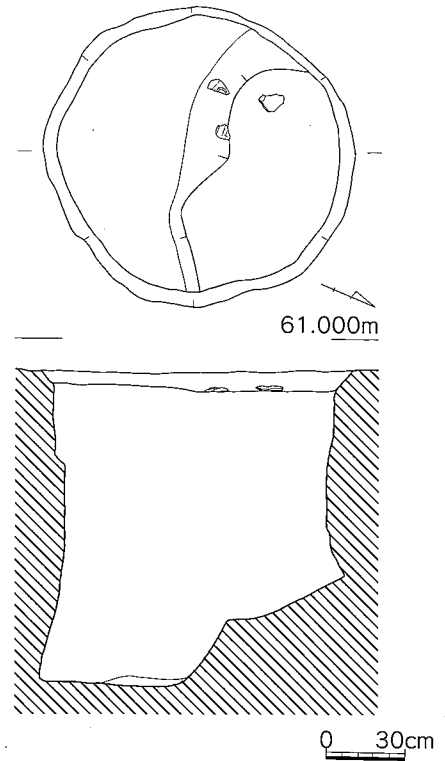
1号井戸(第9図)

C地区北側で検出された素掘り井戸である。平面プランは直径約130cmの円形、断面は途中に片側だけテラスを設けた逆L字状を呈する。深さは約124cmである。遺構内および壁面より直径15cm程度の川原石が散見されたが、本遺構に伴うものかどうかは不明である。時期は出土遺物から19世紀代と考えられる。

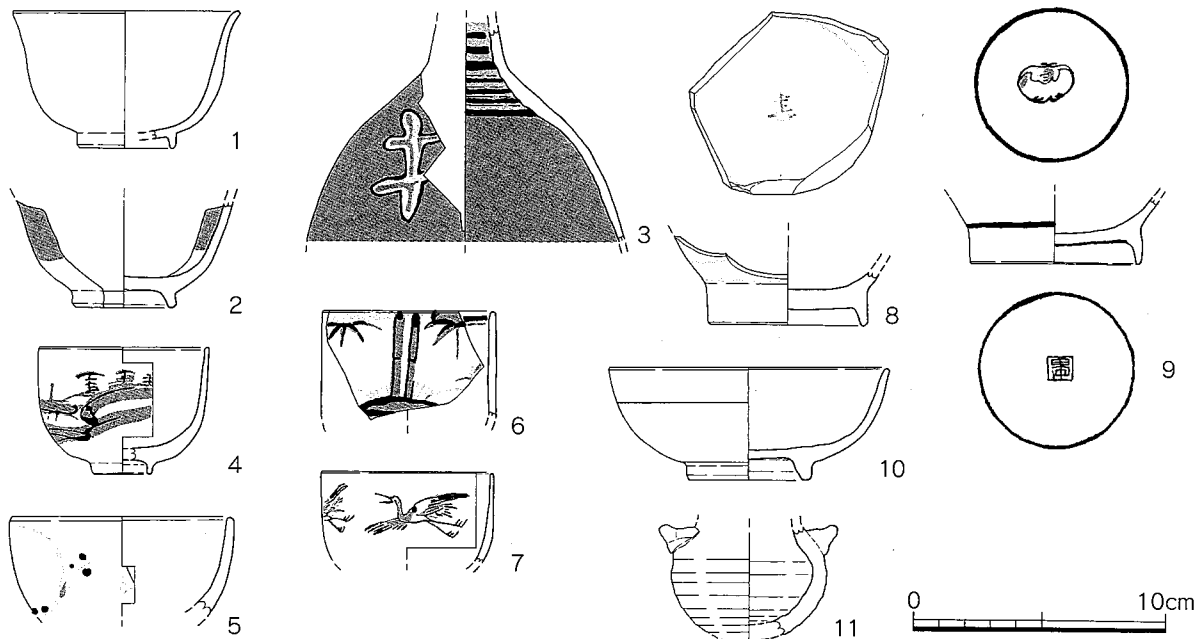
出土遺物(第10図)

主に陶磁器が出土している。1、2は陶器碗。3は陶器瓶。4～9は磁器碗。10は青磁碗。11は香炉である。1は端反碗で口径8.8cm、器高5.4cm、底径3.7cmを測る。畳付以外に灰緑色釉がかかる。2は底径3.6cm、胴部に褐釉が帯状にかかる。見込みに径3mmほどの粘土が付着している。3は瓶で外面に陽刻が施されている。半分が欠けているが「井」であろうか。内外面ともに肩部まで鉄釉がかかる。4は染付碗で口径6.6cm、器高5.1cm、底径2.2cm。外面に松と海が描かれる。5は染付碗で口径8.6cm、外面に描かれるのは水仙であろうか。6は染付碗で口径6.8cm。外面に竹と笹が描かれ、口縁内面に2重圈線が描かれる。7は染付碗で口径6.5cm。外面に鶴が2羽描かれている。8は碗で底部のみ残存。底径5.9cmで見込みに圈線、中央におそらく「壽」であろう字がくずして描かれる。外面体部と高台の境には2重圈線が描かれる。9は底径6.6cmで底部のみ残存。見込みに柿、高台内の字は「青」であろうか。明治頃。10は青磁碗で復元口径10.1cm、器高4.5cm、見込みに蛇の目釉剥ぎを施している。11は香炉であろうか。底部、口縁部が欠損する。胴部最大径7.3cm。つまみ部は後から接合したものである。

そのほかに須恵器や鹿角などが出土するが、井戸が埋まる際に混入したものであろう。

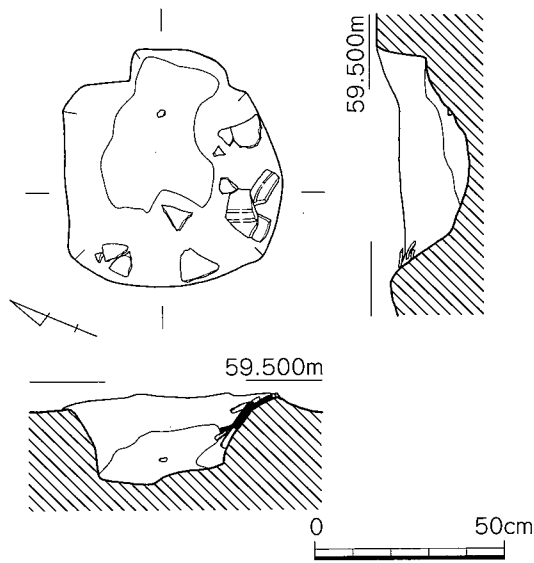


第9図 1号井戸実測図(1/30)



第10図 1号井戸出土遺物実測図(1/3)

(3) 埋甕



第11図 埋甕実測図(1/20)

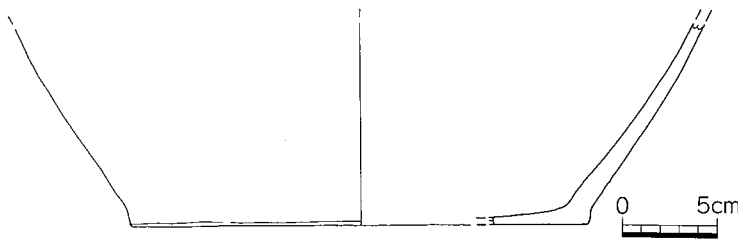
埋甕(第11図)

1号埋桶の南側に隣接する埋甕である。南北63cm、東西65cm、深さ21cmの掘り方に甕を埋めている。土坑の南壁に遺物がかたまった状態で出土し、甕の底部しか残存していないことから、遺構上部は破壊されたものと思われる。置かれていた状態は不明である。埋甕式便槽もしくは1号埋桶に伴う手水鉢であろうか。

出土遺物(第12図)

1は便槽に使用されたとと思われる甕である。底部のみ残存で、残存高10.5cm。上部は削平された際に破壊されたようである。復元底径23.9cmを測る。外面は丁寧にナデられており僅かに叩きの工具痕が残る。胴部内面は当て具痕が僅かに残る。外面底部と

体部の境はナデにより接合されている。内面はナナメ、ヨコ方向の刷毛目、底部はナデによって仕上げられているが風化が激しい。



第12図 埋甕出土遺物実測図(1/4)

(4) 溝

C地区内で3条の溝を検出した。いずれも断面は浅いU字形を呈し、深さは5cm以下である。

1号溝

西側調査区外から南側調査区外へ続く長さ4.1mの溝である。幅は約52cm、深さは1~3cmほどである。

2号溝

2号埋桶の西側から検出された溝である。長さ2.37m、幅35cm、深さ2~5cm。

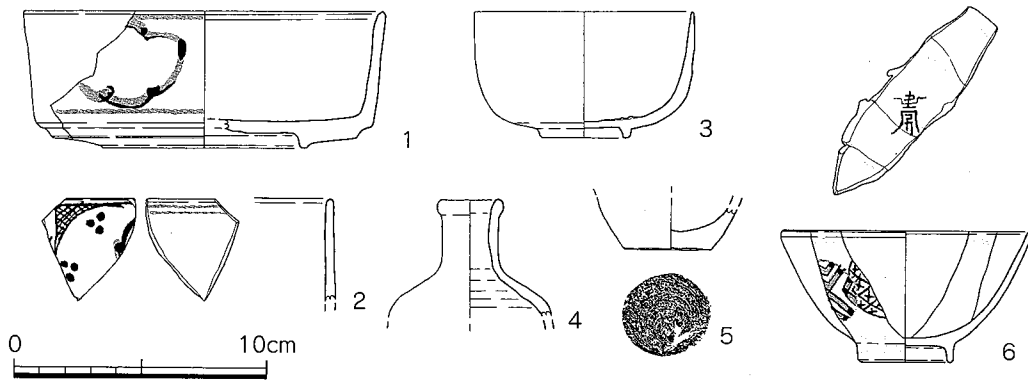
3号溝

1号埋桶西側で検出された溝である。長さは約6.8mで幅約70cm、深さ1~4.5cm。調査区西壁から東へのび、5.5m付近で南側に曲がり2号埋桶によって切られる。1号溝とほぼ平行に走っており、1号埋桶、1号埋甕を中央付近ではさむことから、これら便槽に関連する溝であった可能性がある。

出土遺物(第13図)

1、2は1号溝。3、4は2号溝。5、6は3号溝から出土。

1は磁器染付蓋物である。復元口径14.2cm、器高5.5cm、底径7.8cmを測る。外面に花文を描き、上下に圏線を巡らせる。口縁部は摩滅する。2は磁器染付碗で外面に草花文、口縁内面に2重圏線を巡らす。3は陶器碗で復元口径8.8cm、器高5.1cm、高台径3.4cm。白釉が全面にかかる。見込みに1~3mm程度の褐色砂粒が残る。焼成良好。4は陶器瓶の口縁部で肩部まで残存する。口縁径2cm。内外面に褐釉がかかる。5は陶器瓶の底部である。4と器形、外面の色調が似るが、内面の色調が異なる。内外面褐釉で底部は露胎で、糸切り跡がみられる。6は磁器染付碗で復元口径9.8cm、器高5.3cm、底径3.6cm。外面にそれぞれ異なった円形の幾何学文を重ねて巡らせている。見込みの文字は「肅」であろうか。口縁内面に2重圏線、見込みに圏線を巡らせる。1810年頃。



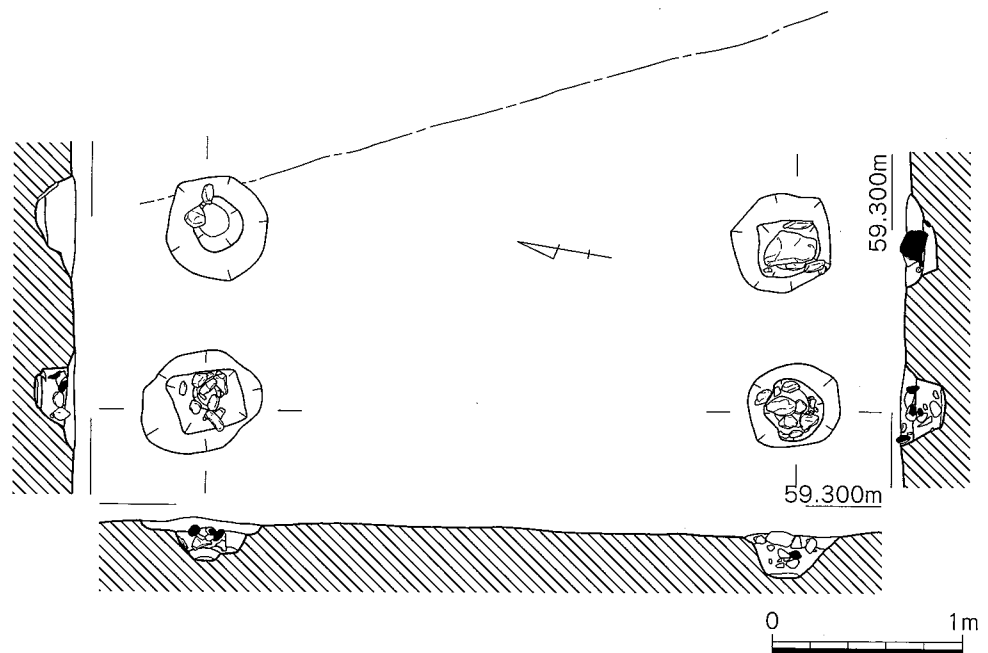
第13図 1~3号溝出土遺物実測図(1/3)

(5) 堀立柱建物

1号堀立柱建物(第14図)

C地区東側調査区外へのびる堀立柱建物である。南北3.14m、東西0.96m、1間×1間まで確認している。柱穴の深さは約17cmほどである。柱穴からの出土遺物は確認されなかった。

その他に3号溝の北側で柱穴の並びを確認しているが、東西で20cmほど

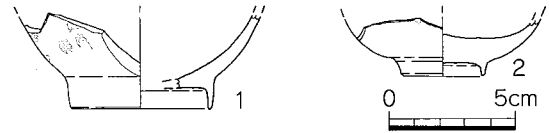


第14図 1号堀立柱建物実測図(1/40)

離れた平行四辺形を呈しており、1棟の堀立柱建物とするには疑問が残るため、実測図は掲載していない。
3号溝に隣接する柱穴より磁器染付碗が出土している。

出土遺物(第15図)

3号溝北側で検出された柱穴からの出土遺物である。1は磁器染付碗である。底部のみ残存。底径5.4cm。外面に輪郭の淡い草花文が描かれ、高台上部に2重圈線が巡る。胎土精良で焼成良好。2は磁器染付碗である。底部のみ残存で底径3.1cm。外面にのみ文様が描かれる。



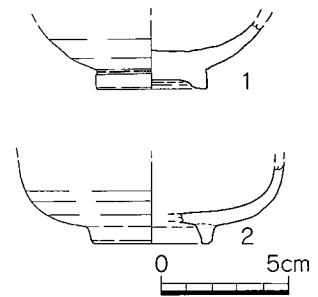
第15図 柱穴出土遺物 (1/3)

(6) 石垣状遺構(第17図)

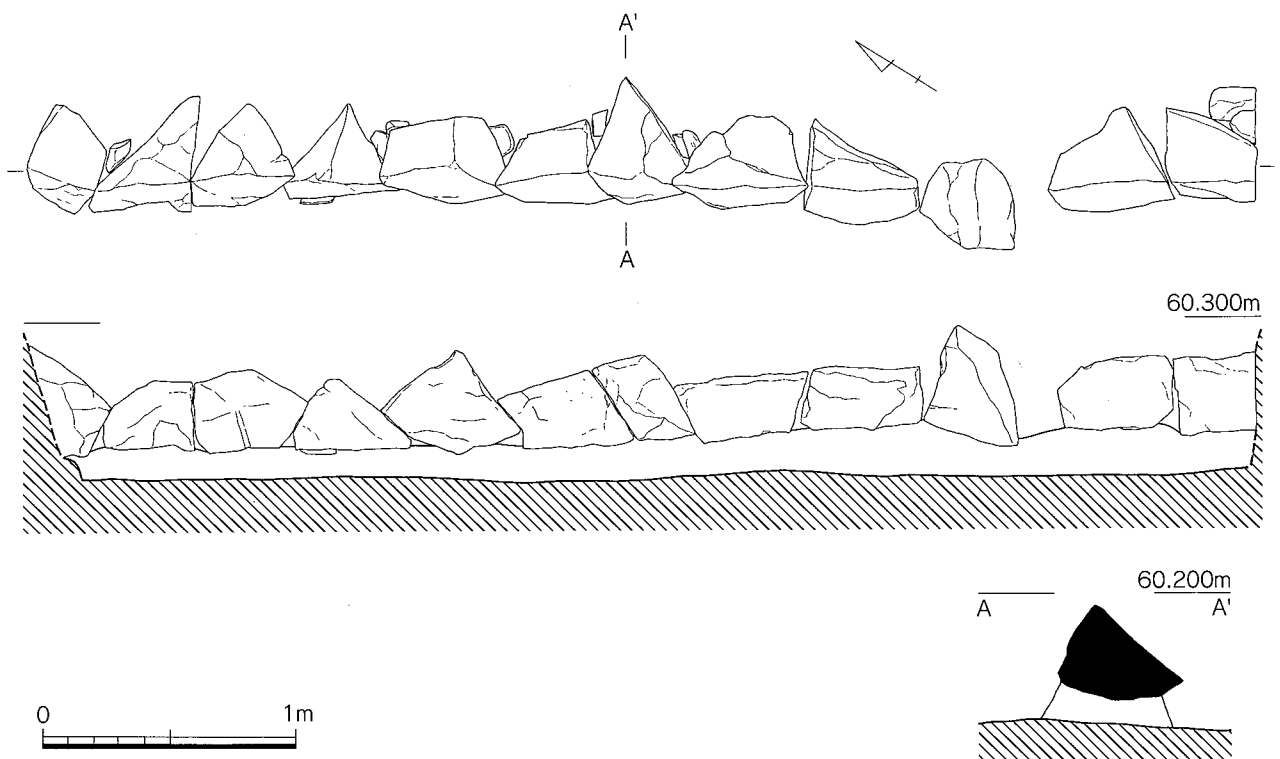
D地区西側で検出された石垣状の遺構である。残存長4.9m。調査区を北西から南東へぬける。幅約1mで、30cmから50cm大の石を1段、1列に並べた簡素なものである。

出土遺物(第16図)

1は青磁碗で底部のみ残存。底径3.6cm、見込みは蛇の目釉剥ぎを施す。高台と体部の間に段がつく。高台内は粗雑なへら切りが施される。2は青磁碗で底部のみ残存。底径4.1cm、見込みは蛇の目釉剥ぎを施している。



第16図 石垣状遺構出土遺物(1/3)



第17図 石垣状遺構平面実測図(1/30)

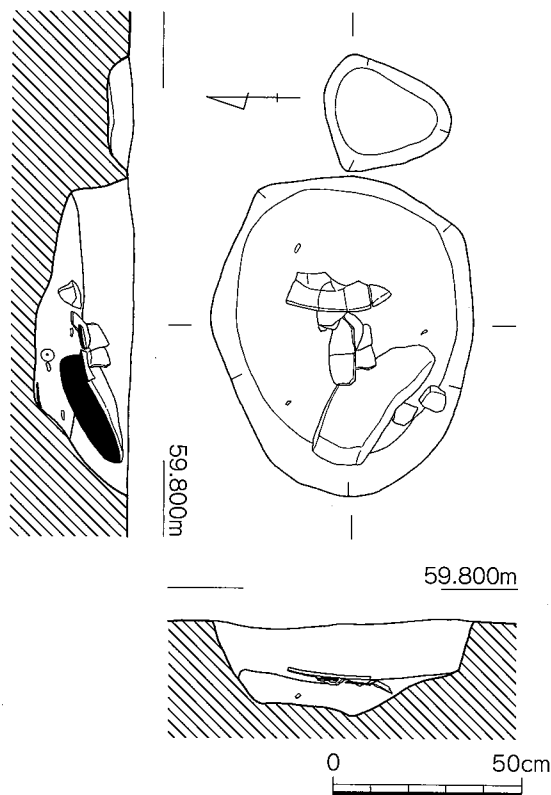
(7) 焼土坑 (第18図)

石垣状遺構の北東で検出した土坑である。規模は東西長85cm、南北長70cmの楕円形で、深さは約25cmである。最下層で焦土が検出されている。また土坑内西側に長さ40cm、幅18cmの大型の石が床面から7cmほど浮いた状態で検出されている。表面にススが付着していることから、この土坑に関連するものと考えられるが、当初の位置が不明なため、詳細は不明である。そのほかに鉄釘、寛永通宝が出土している。

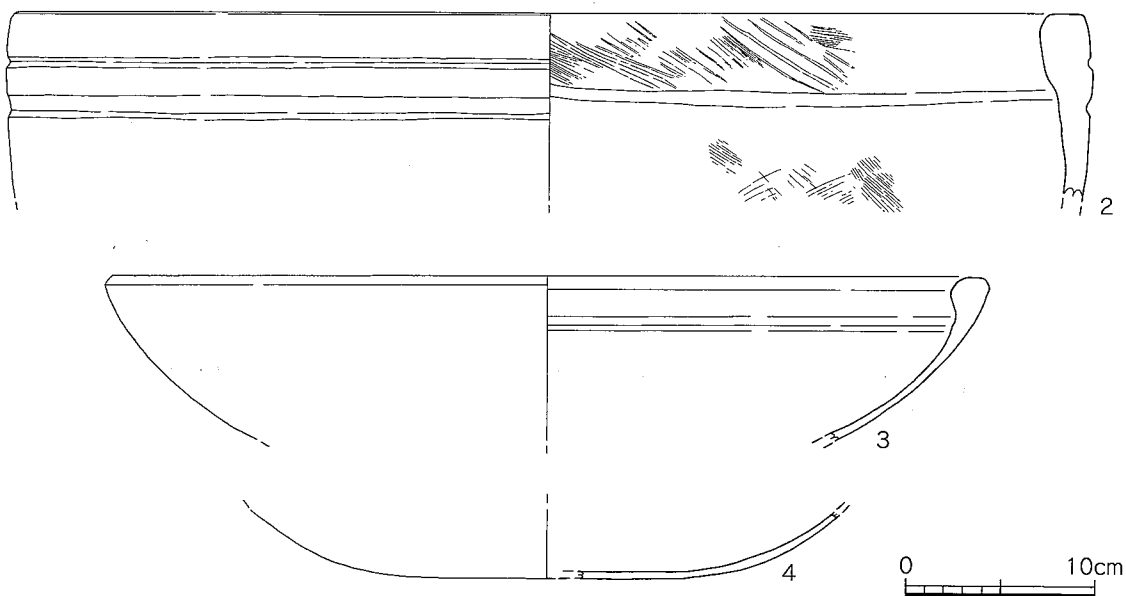
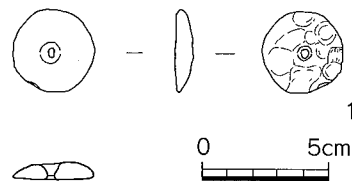
出土遺物 (第19図)

1は土製紡錘車である。直径約3.2cm、厚さ0.7cm、重さ6.71g。片面のみ球面の扁平な形状をしている。表側はナデによって調整されている。裏側の扁平な面は指頭圧痕が鮮明に残っている。

2は大型の甕で復元口径52.6cmを測る。口縁外面に2条の沈線を巡らせる。外面はナデ、内面は口縁部でナナメ刷毛、ヘラ状工具による1条の沈線を巡らせ、細かなナナメ刷毛が施されている。3、4は同一の鉢であるが接合しない。復元口径43.8cm、内外面ともにナデが施されているが、調整は不明瞭。底部はススが付着する。



第18図 焼土坑実測図 (1/20)



第19図 焼土坑出土遺物実測図 (1/4)

(8) ピット

C地区中央から北側にかけて、多数のピットが検出された。柱穴と考えられるものもあるが、対応する柱穴が確認できないものがほとんどである。遺物を検出したものも僅かである。また、出土した遺物についても図示に耐えないものが多い。

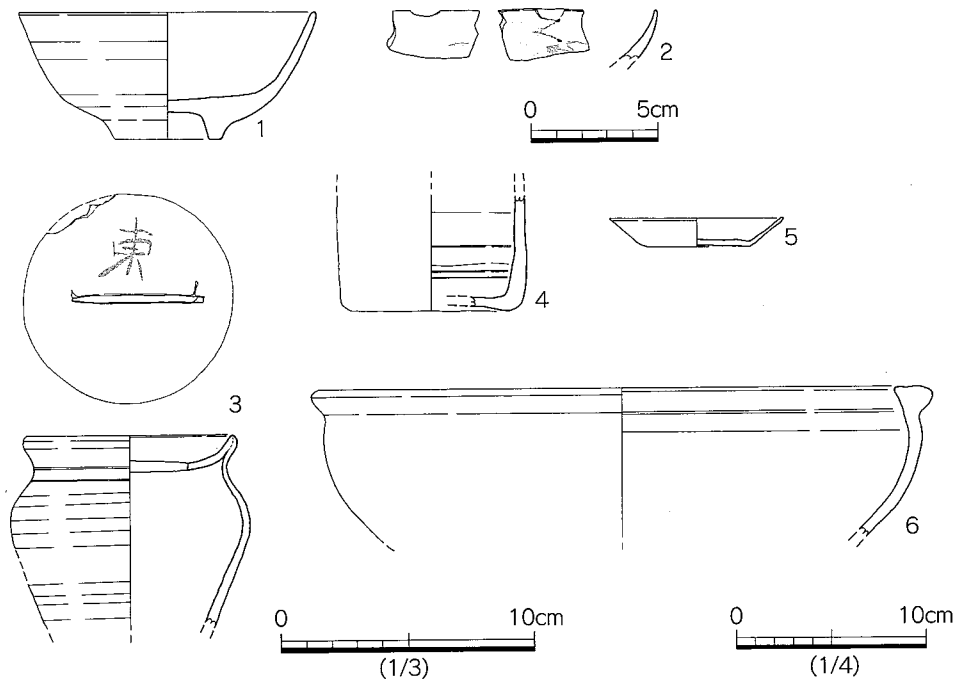
84号ピットは1号堀立柱建物の西側約1mで検出した。98号ピットは調査区中央で検出。52号ピットは3号溝を切る。13号ピットは2号埋桶の西側で検出された。

出土遺物(第20図)

1は84号ピットから出土した陶器碗で復元口径11.8cm、器高5cm、底径4.2cm。見込みに蛇の目釉剥ぎを施しており、焼成の際に重ねていた碗の底部であろう釉と粘土が付着する。2は磁器碗の口縁であるが、外面に描かれた文様は不明。

3、4は98号ピットより出土。5は52号ピット出土。6は13号ピット出土。

3は素焼きの小型壺である。底部が欠損する。口径8.1cmで同質の皿を接合することで口を塞いでおり、5.1cm×0.3cmの長方形の孔が穿ってある。また見込み部分に「東」の文字が描かれている。近代の製品であろう。4は陶器碗で復元底径6.1cm、外面はナデによって調整。内面無釉。5は土師皿で口径6.8cm、器高1.1cm、底径4cm。内外面ともに回転ナデ、底部は糸きりによって仕上げられる。6は青磁鉢で復元口径14.4cm、口縁部で緩やかに内傾する。内外面ともにナデが施され、内外面に灰緑色の薄い釉がかかる。

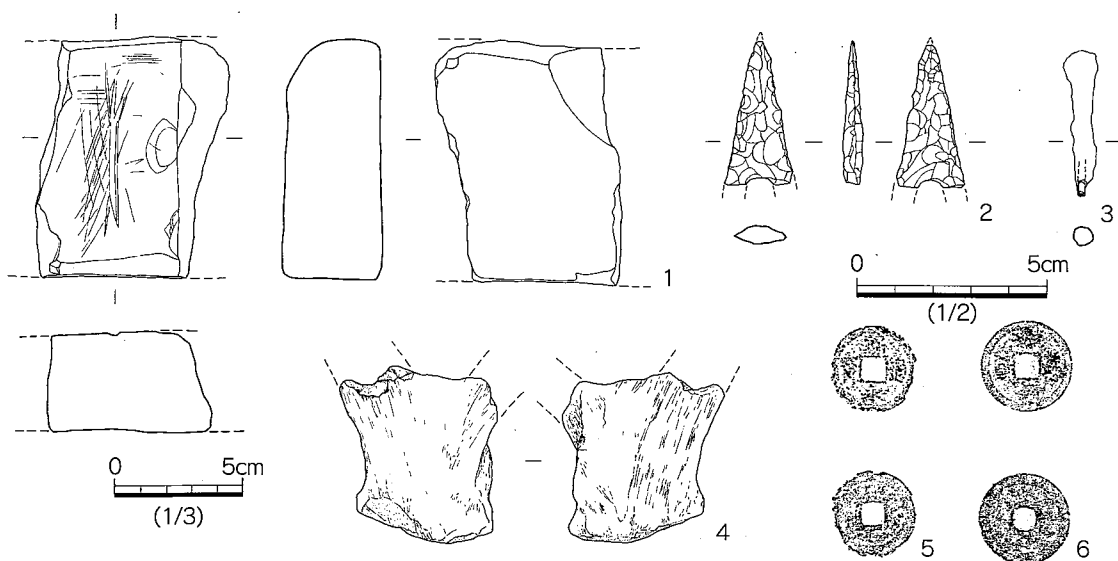


第20図 84・98・52・13号ピット出土遺物実測図(1/3、6は1/4)

(9) 石器・鉄器・その他の遺物(第21図)

遺構から出土した石器、鉄器、その他、および遺構に伴わない遺物について報告する。

1は砥石である。試掘時の出土。長軸長9.5cm、幅6.5cm、厚さ3.8cm、重さ448.91g。側面は折損しており、長軸側が使用されている。表面に幾筋もの使用痕が見られる。他の面には使用痕はみられず、片面のみが使用されたようである。2は237号ピットから出土したサヌカイト製の石鏃で先端、かえしが折損する。残存長3.8cm、厚さ0.5cm、重さ2.75g。3は焼土坑より出土した鉄釘である。錆膨れが激しく詳細な形状は不明。残存長3.85cm、幅0.52cm、厚さ0.5cm、重さ1.73g。4は3号井戸出土の鹿角基部である。残存長4.5cm、幅3.4~4cm。重さ10.91g。風化が著しい。5、6は寛永通宝である。5は焼土坑より出土。径2.2cm、厚さ0.6cm、重さ2.89g、遺存状態が悪い。6は造成土中より出土しており、攪乱を受けた際に混入したものであろう。径2.4cm、厚さ0.7cm、重さ2.35g。文字の判読が困難なほど錆上がりが悪い。



第21図 石器・鉄器・その他の遺物実測図(1/2、1は1/3)

末永梅木田遺跡

1. 調査の概要

(1) 調査の概要

末永梅木田遺跡は、末永数蔵町遺跡より南約400mに位置する。事前の確認調査によって、溝が検出された。調査範囲を分割し、それぞれ北からE地区、F地区、G地区として調査している。調査範囲は長さ約190m、幅約10mである。

E地区は南側半分がほ場整備によって削平されている。F地区は南側から柱穴検出。G地区は全体的に攪乱が多く、特に南側は残存状態が悪い。

(2) 基本層序

数蔵町遺跡と同様、全体的に南から北へ緩やかに傾斜する地形である。F地区北側は耕作による削平を受けている。その上に現代の造成土、真砂土がのっている。表土は耕作土である。数蔵町遺跡にみられた弥生時代の包含層はみられない。北側では一段低くなった地形となっている。

2. 近世・近代の遺構と遺物

(1) 溝

梅木田遺跡では、溝が検出されている。それぞれ時期が異なる。

1号溝

E地区南側で検出された溝である。幅30cm、深さ15～22cm。

2号溝

1号溝の北側で検出。幅55cm、深さ約5cm。

3号溝

4号溝の南側で検出。幅60～75cm、深さ4～10cm。須恵器が出土する。

4号溝

E地区最北端で検出。3号溝と並ぶ。須恵器が出土。幅72～79cm、深さ1～4cm。上部は削平されている可能性がある。

5号溝

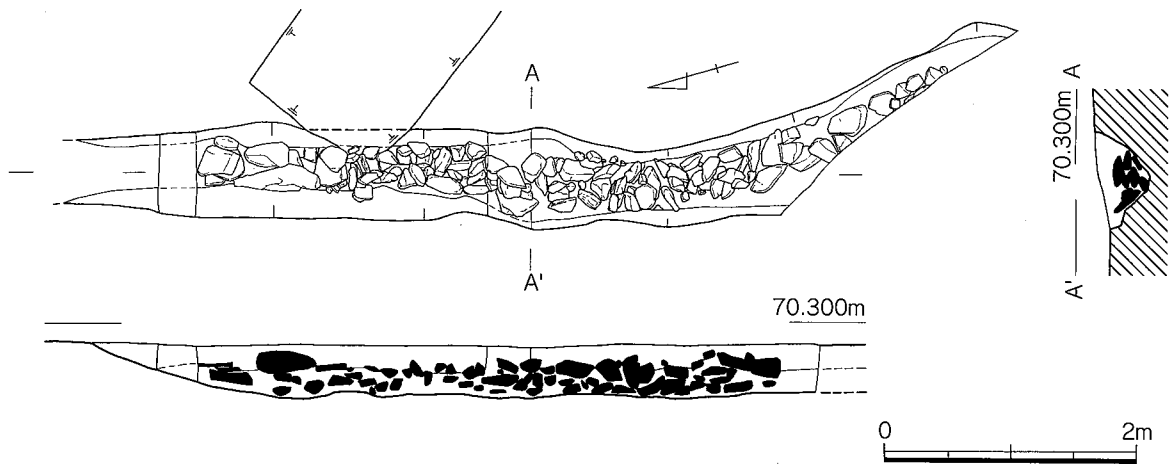
F地区で検出された溝で調査区を東西に横切る。近代の暗渠排水路である。土管や竹筒などが出土した。幅45cm、深さ2～7cm。

6号溝(第22図)

5号溝をきる。こぶし大の石が床面に敷き詰められた溝である。幅は60～70cmで、深さは42cmほどである。長さは5.67mまで確認でき、南側調査区外へと続く、北側は浅くなり溝がなくなる。陶器碗が出土する。

7号溝

G地区で検出された幅71cmの溝である。深さは西側で18cm、東側で浅くなる。弥生土器片が出土しているが、図示に耐えない。



第22図 6号溝実測図(1/60)

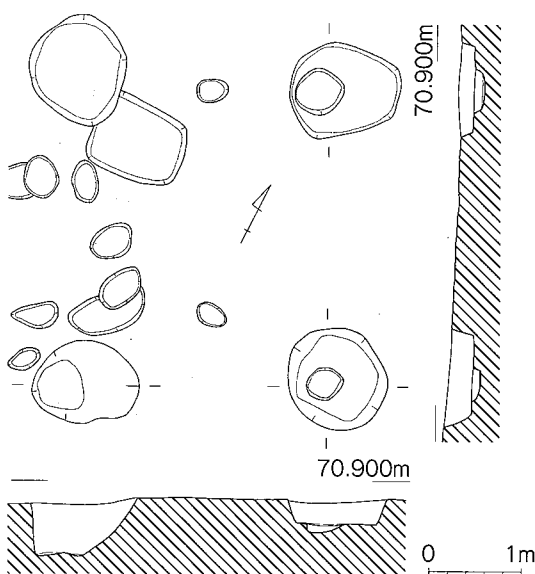
(2) 堀立柱建物

1号堀立柱建物(第23図)

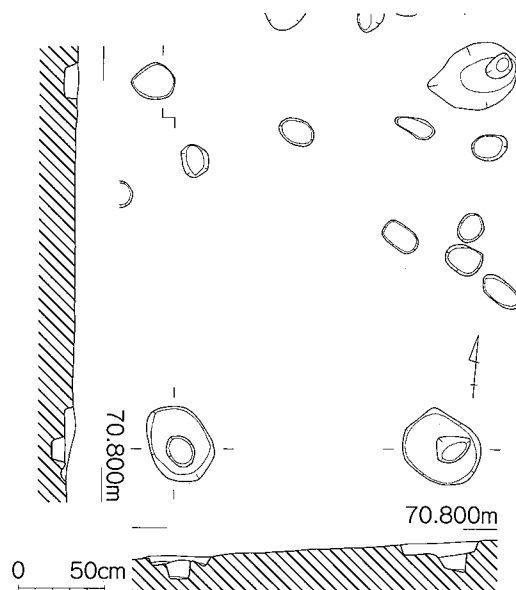
F地区5号溝の南東12mで検出された南北1.7m、東西1.49m、1間×1間の堀立柱建物である。柱穴は深さ14~17cmで、南側の柱穴のみ27cmとなっており、別の用途に利用するため掘削している可能性がある。

2号堀立柱建物(第24図)

F地区5号溝の南東4mで検出した南北2.15m、東西1.7m、1間×1間まで確認できた堀立柱建物である。柱穴の深さは12~16cmで、北西側柱穴のみ9cmほどであるため、別の遺構である可能性がある。



第23図 1号堀立柱建物実測図(1/40)



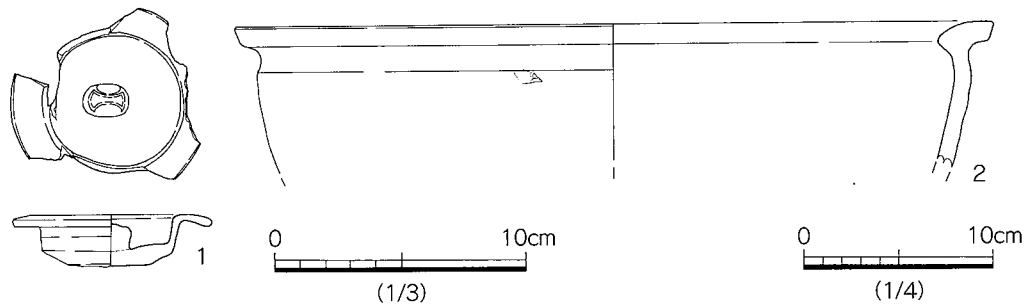
第24図 2号堀立柱建物実測図(1/40)

(3) ピット

E～G地区で多数のピットが検出されている。しかしながら遺物が検出されたピットは僅かである。また出土遺物の多くが細片であるため、図示に耐えなかった。

出土遺物(第25図)

1は209号ピットから出土した落とし蓋である。復元口径7.9cm、器高2.1cm。表面は濃緑色の釉がかかり、裏面無釉。つまみは中心よりわずかにずれる。胎土精良で焼成良好。19世紀初頭頃。2は168号ピットより出土した青磁鉢である。復元口径37.6cm、器面調整は内外面ともにナデで、外面は粗雑なつくりで歪み、焼成前の圧痕が残る。内外面ともに濃灰緑色の釉がかかるが、内面は藁灰釉によって濃青色から乳青色に窯変している。



第25図 208・168号ピット出土遺物実測図(1/3、2は1/4)

3. その他の時代の遺構と遺物

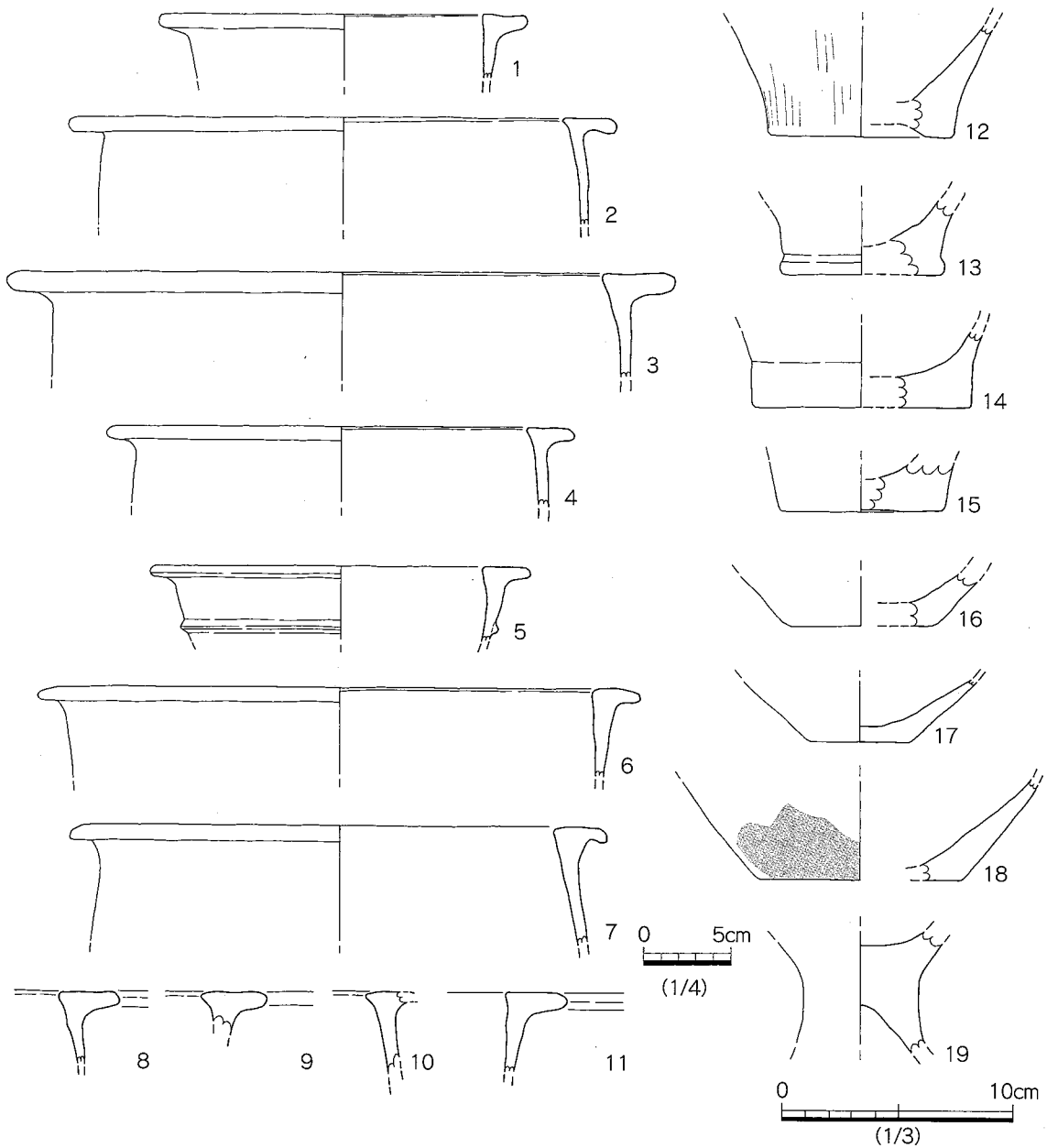
(1) 弥生時代の遺構と遺物

包含層中より弥生土器が多数出土している。遺構から出土する弥生土器は少ない。その多くが風化、摩滅によって、微細な破片となっているものが多い。図示しえたものは僅かである。

出土遺物(第26図)

1、2は数蔵町遺跡C地区のピット、3～19は包含層から出土したものである。器種は1～11が甕口縁、12～15は甕底部、16～18は壺底部、19は高杯脚部である。1は214号ピットより出土。口縁部のみ残存で、復元口径16.2cm、内外面ともにヨコナデが施される。内面体部はヘラ状工具によってナデられている。2は118号ピットより出土。復元口径25.2cm、口縁部はヨコナデ、内面はヨコナデとナナメナデ。外面はヨコナデの後、タテナデが施される。焼成良好。胎土は粗い。3は復元口径22.6cm、体部は口縁からほぼ垂直に落ちる。内外面ともにヨコナデが施され、胴部には縦方向の刷毛目がわずかにみられる。焼成良好。4は復元口径21.4cm、内面はナナメ方向のナデが施される。外面は風化により調整不明瞭。5は復元口径16.4cm、口縁部はヨコナデ、口縁下部に1条の突帯を巡らせる。口縁下部より緩やかに内傾する。6は復元口径29.8cm。外面はヨコナデ、内面はナナメナデを施し、胎土には土器片を含む。7は復元口径26.4cm。1/6程度の残存。口唇部は下に垂れ下がる。口縁部はヨコナデ、その他の部位は風化により調整不明瞭。8は口縁内面に指頭圧痕が残る。外面はヨコナデ。9は口縁のみ残存。器面調整はナデ。10は口唇部のみ残存する。11

は口縁部のみの残存。12は復元底径7.8cmで、底部より緩やかに内傾して立ち上がる。外面は縦方向の刷毛目が僅かに残る。内面はヨコナデ、ナメナデが施される。底部は欠損しているが、底部穿孔の可能性はある。13は復元底径6.8cmで1/4程度残存。底部で1段膨らんでいる。14は復元底径9.2cmで1/4残存。底部が比較的厚い。摩滅が激しく、外面はもろくなっている。15は復元底径6.8cmで、1/2程度残存。平底で、胴部は僅かに外傾しながら立ち上がる。風化により内外面ともに調整不明瞭。16は外面にナデが施されるが、内面は風化により調整不明瞭。17は復元底径4.1cmで、内外面ナデが施されているが、風化により調整不明瞭である。18は外面にススが残る。19は外面に縦方向のナデ、内面はナデが施される。



第26図 末永数蔵町・梅木田遺跡出土弥生土器実測図(1/3、1~7は1/4)

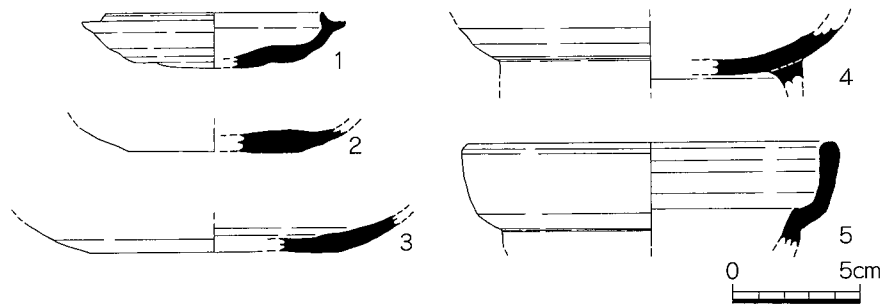
(2) 古墳時代以降の遺構と遺物

末永数蔵町遺跡・梅木田遺跡より須恵器が出土している。遺構に伴うものは梅木田遺跡E地区4号溝から出土したもののみである。

出土遺物(第27図)

1、3は末永梅木田遺跡砂層中、2はE地区4号溝からの出土。4、5は末永数蔵町遺跡1号井戸より出土したものである。

1は須恵器杯身である。口径8.6cm、器高2.2cm、底径3.4cm。焼成良好。ロクロの回転方向は反時計回り。底部はヘラ切りによる粘土が付着。底部内面は仕上げナデが施される。6世紀末から7世紀初頭頃。2は須恵器杯身である。復元底径は6.8cmで、1/3程度の残存。底部はヘラオコシ。底部内面は立ち上がる直前に盛り上がり、1cmほどの厚さとなる。外面はヘラ状工具による筋状の痕跡がみられる。ロクロの回転方向は時計回りで焼成良好。3は須恵器杯身である。1/5程度残存する。復元底径9.8cmで底部はヘラオコシ。内面は回転ナデの後、仕上げナデが施される。ロクロの回転方向は時計回りで焼成良好。4は須恵器杯身である。調整は回転ナデ、胴部はヘラケズリが施される。脚部は後から接合したもので、接地部は欠損している。5は瓦質の受け口状口縁の鍋であろうか。口縁内面で段がつき立ち上がる。復元口径14.5cm、内外面ともに回転ナデが施される。外面は丁寧にナデられるが、内面は粗い。ロクロの回転方向は反時計回りで焼成良好。



第27図 末永数蔵町・梅木田遺跡出土須恵器・瓦質土器(1/3)

IV. まとめ

今回の報告書は、末永遺跡群の末永数蔵町・梅木田遺跡の発掘調査の成果である。

末永数蔵町遺跡の主な遺構は近世・近代に属するものである。

掘立柱建物が3棟確認されたが、すべて1間×1間しか確認できなかった。C地区の1号掘立柱建物のように調査区外へ続くと考えられるものもある。平成18年度に行なわれた末永数蔵町遺跡の調査においても、1間×1間の掘立柱建物が2棟、1間×2間が1棟確認されている。このことから、当該地域において住居は1間×1間を基準としながらも、1間×2間といった建物も存在したことが推測できる。また、遺物は確認されず、並びを持つものも確認できなかったが、柱穴が多数検出されていることから、他にも複数の建物が存在したことは確実であろう。

焼土坑では寛永通宝と土製紡錘車が出土しており、寛永通宝が六道銭、土製紡錘車が副葬品の墓であった可能性が考えられる。しかしながら、遺構上部の削平によって、遺物が位置を変えていることもあり、墓といえる根拠に乏しい。

生活遺構としては、数蔵町遺跡で検出された1号・2号埋桶、埋甕が便槽であった可能性がある。遺跡全体が大きな攪乱を受けていることもあり、これら便槽が建物外、建物内かの判断はできなかったが、並列する便槽とそれを取り囲む溝、これらに加え、井戸が比較的固まって検出されたことから、末永数蔵町C地区に町屋敷の存在が想定される。末永村における建物構造の実態を知る上で興味深い資料といえる。

遺構の配置、攪乱の状況、地形が北東方向へ上がっていることなどから考えると、末永数蔵町遺跡の北側から東側にかけては、より保存状態の良い遺構が残っていることが推測される。今後の調査に期待したい。

その他の時代の遺物としては、弥生土器、須恵器が確認されているが、そのほとんどが遺構に伴わないものであった。末永梅木田遺跡の4号溝から出土した須恵器は溝に伴うものであろうが、溝の上部は削平されており、全体像をつかむことはできなかった。

末永遺跡群では末永初田遺跡の弥生時代中期を中心とした遺物包含層のほか、ピット、土坑が検出されており、末永六ノ坪遺跡においても甕棺が出土している。今回の調査においても末永数蔵町遺跡において、ピットから弥生土器が僅かではあるが検出されていることもあり、末永地区に弥生時代の集落などの存在が推測される。

以上のように、末永数蔵町遺跡、梅木田遺跡の発掘調査によって、末永地区において弥生時代から近世にかけての遺構が確認された。当地域における近世以前の遺構については、近・現代の削平を大きく受けており、詳細を知りうるができなかったことが悔やまれる。

参考文献

- 角 浩行編 『川原川右岸地区遺跡群Ⅱ』 1998 前原市文化財調査報告書第65集
江崎靖隆編 『末永数蔵町遺跡』 2008 前原市文化財調査報告書第97集

圖 版

図版2



2-1 末永梅木田遺跡C地区(真上から)



2-2 末永梅木田遺跡D地区(真上から)



2-3 末永梅木田遺跡E地区(真上から)



3-1 1号埋桶検出状況

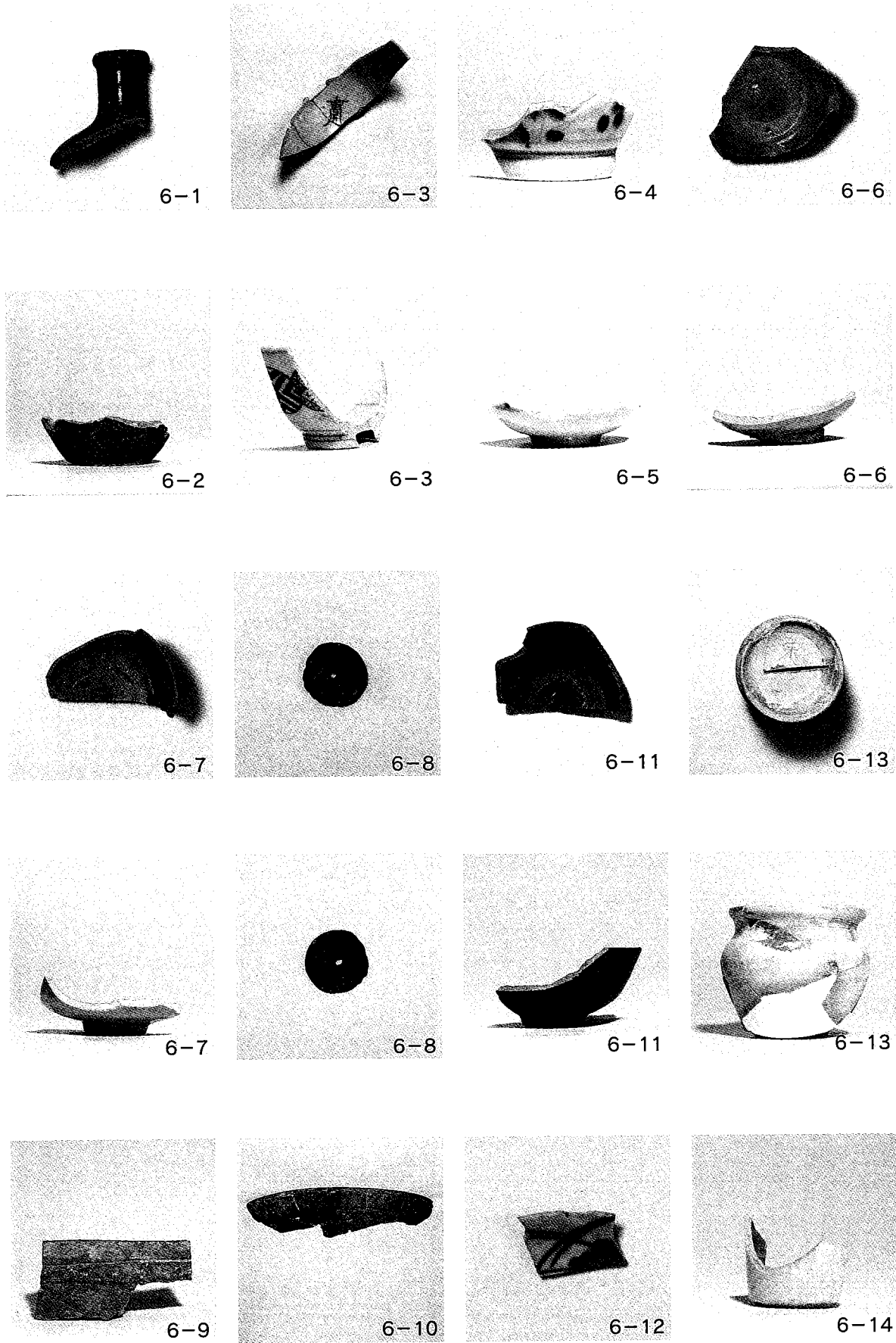


3-2 1号埋桶 底板検出状況

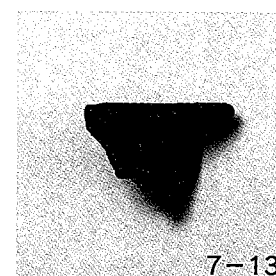
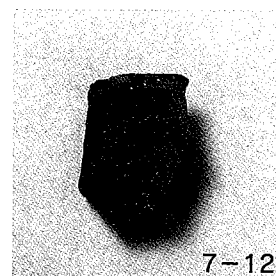
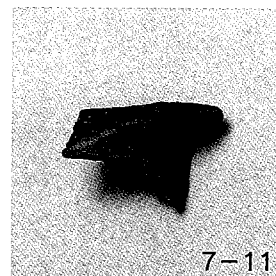
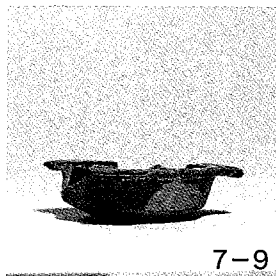
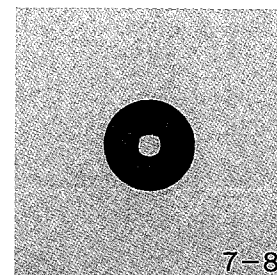
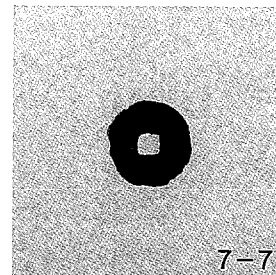
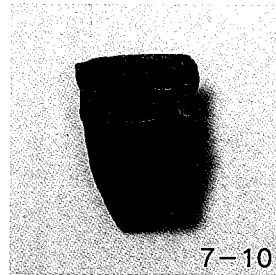
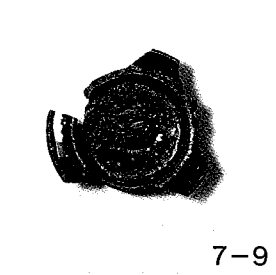
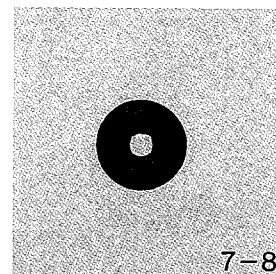
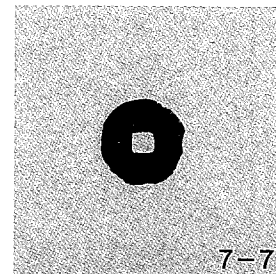
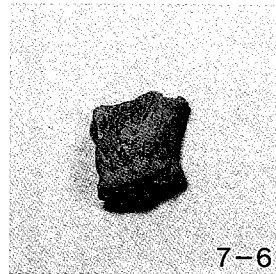
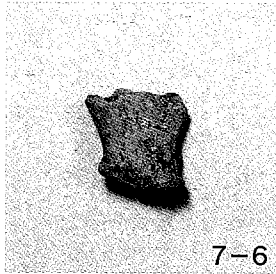
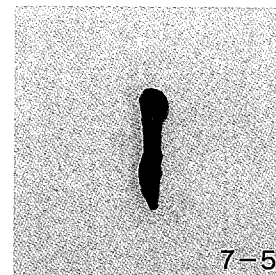
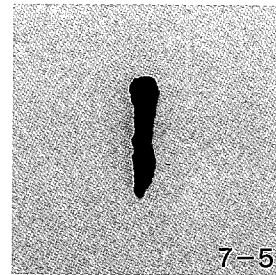
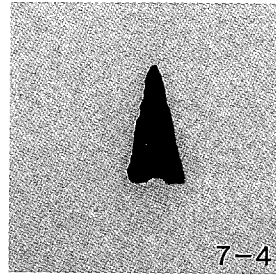
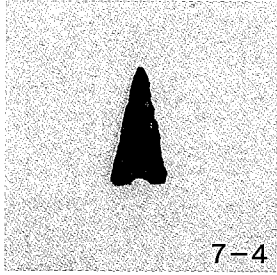
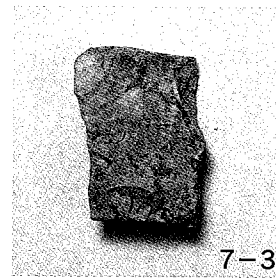
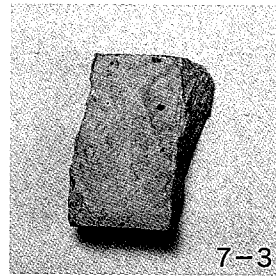
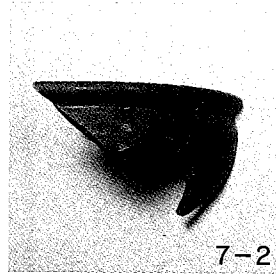
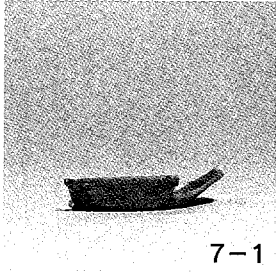


3-3 2号埋桶 底板検出状況

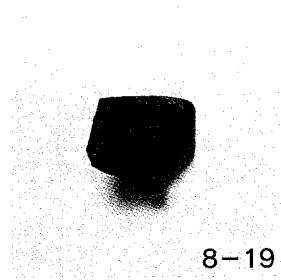
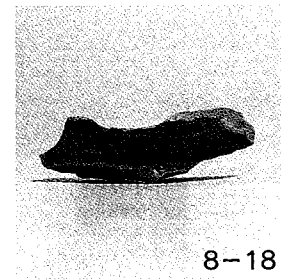
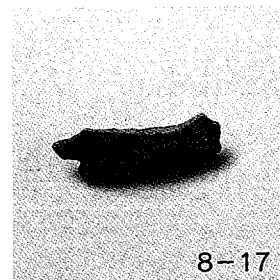
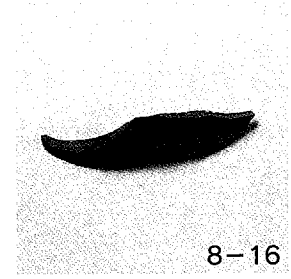
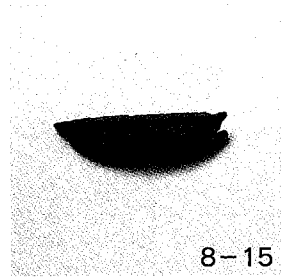
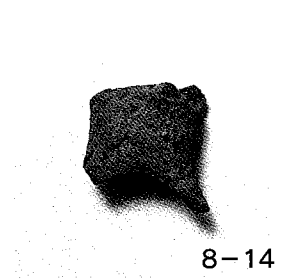
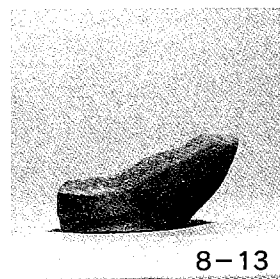
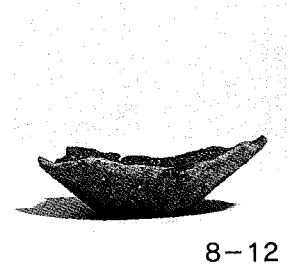
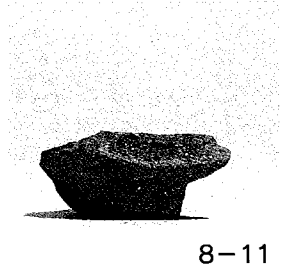
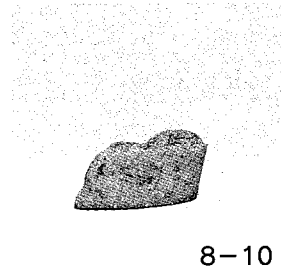
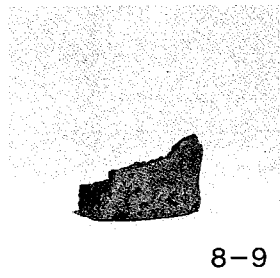
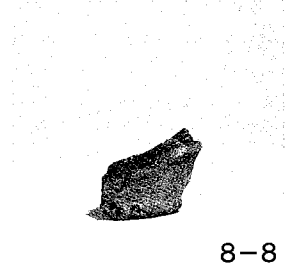
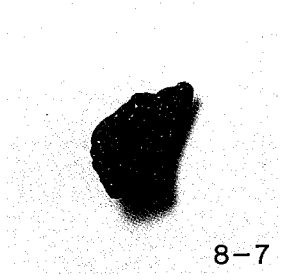
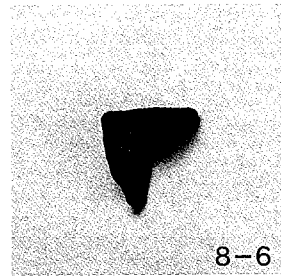
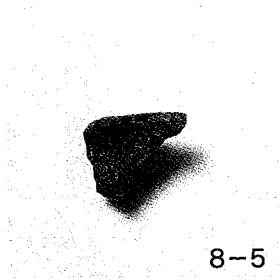
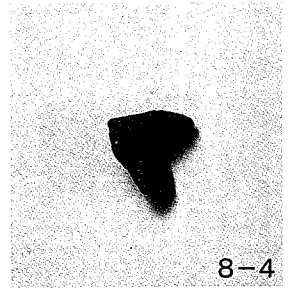
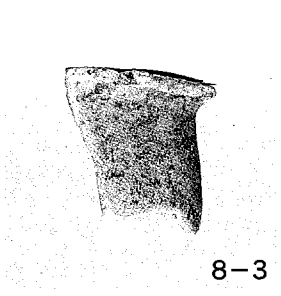
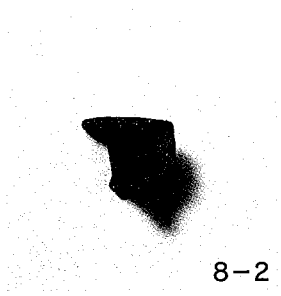
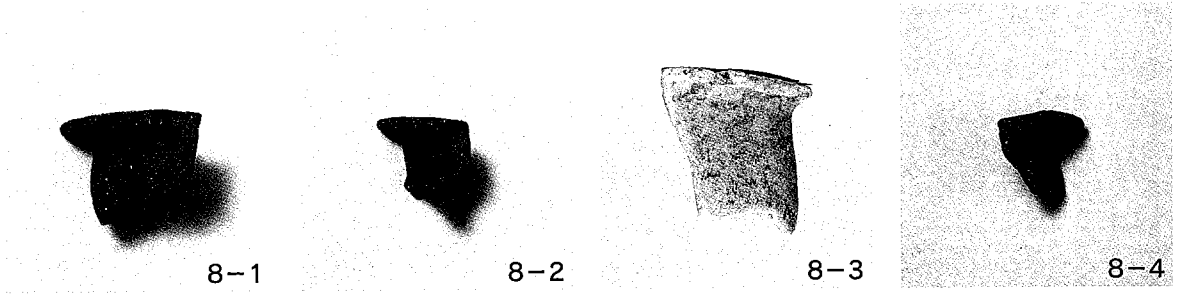
图版6



图版7



图版8



報 告 書 抄 録

ふりがな	すえながすぞうまちいせき に							
書名	末永数蔵町遺跡Ⅱ							
副書名	主要地方道早良・大野城線 道路拡幅工事に伴う文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	前原市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第101集							
著者名	龍 孝明							
編集機関	前原市教育委員会							
所在地	〒819-1117 福岡県前原市前原西一丁目8番14号 TEL 092-323-1111							
発行年月日	2009年 3月31日							
保管場所	{写真}	{図版}	{遺物}	伊都国歴史博物館				
保管場所所在地	福岡県前原市大字井原916番地							
ふりがな	ふりがな	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
すえながすぞうまちいせき 末永数蔵町遺跡	ふくおかけんまえはるし 福岡県前原市	40222		33°32'09"	131°44'11"	2007.7.17~ 2007.10.24	394m ²	道路拡幅
すえながうめきだいせき 末永梅木田遺跡	おおあざすえなが 大字末永			33°31'59"	131°44'07"	2007.11.5~ 2008.1.9	190m ²	道路拡幅
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
末永数蔵町遺跡	集 落	江戸～明治時代	堀立柱建物、井戸、埋桶、埋甕、焼土坑		陶磁器、石器、鉄器、砥石、弥生土器、須恵器			
末永梅木田遺跡	集 落	江戸～明治時代	堀立柱建物、溝		陶磁器、弥生土器、須恵器			

末 永 数 蔵 町 遺 跡 Ⅱ

主要地方道福岡早良・大野城線
道路拡幅工事に伴う文化財調査報告書

前原市文化財調査報告書 第101集

2009年3月31日発行

発行 福岡県前原市教育委員会

〒819-1117 福岡県前原市前原西一丁目8番14号

TEL 092-323-1111

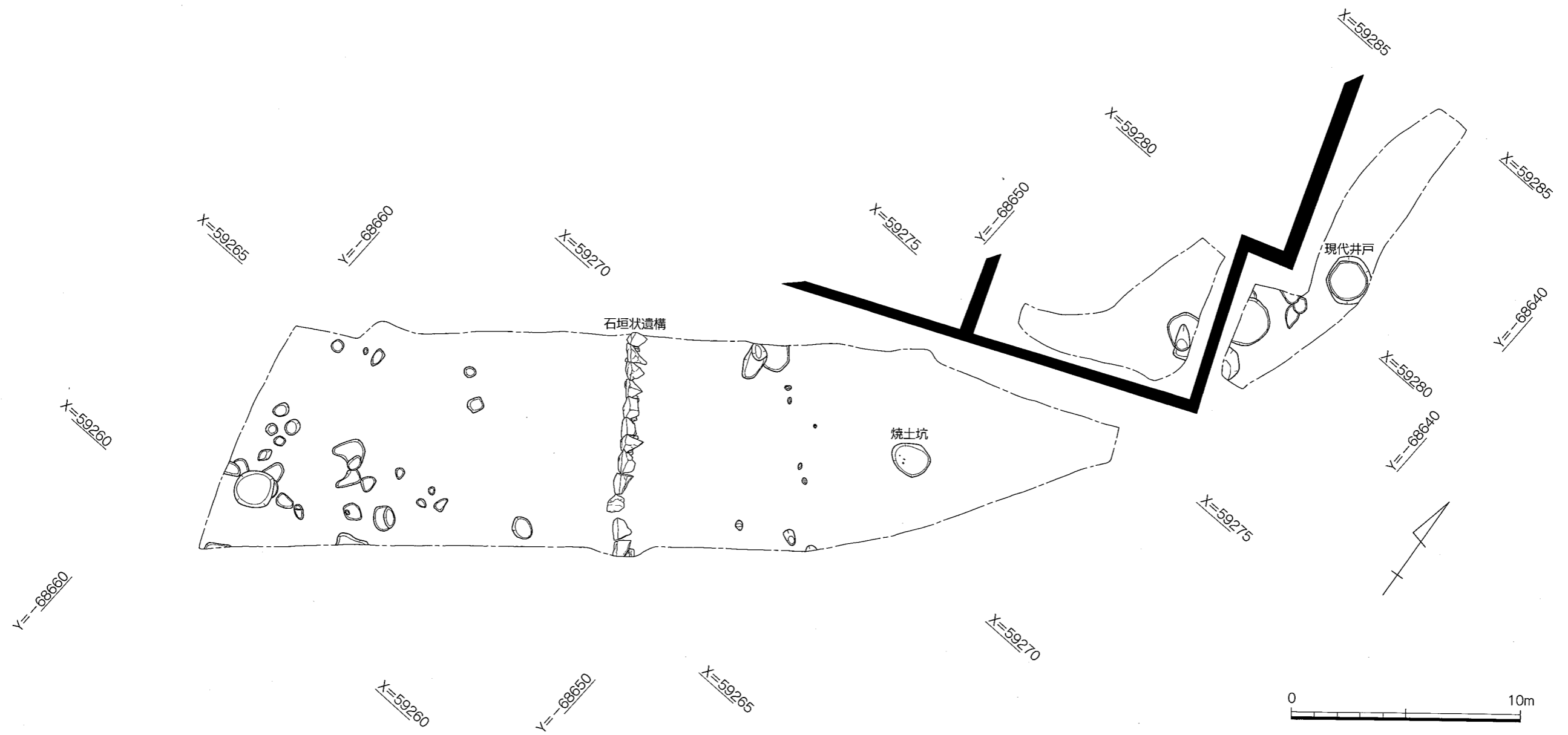
印刷 株式会社 ディスジャパン

〒810-0041 福岡県福岡市中央区大名一丁目9番30号

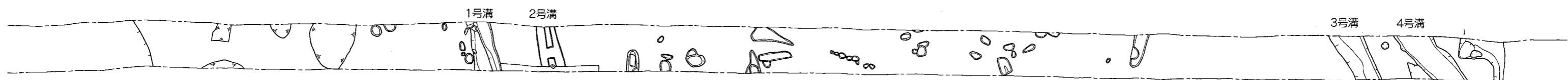
TEL 092-712-0431



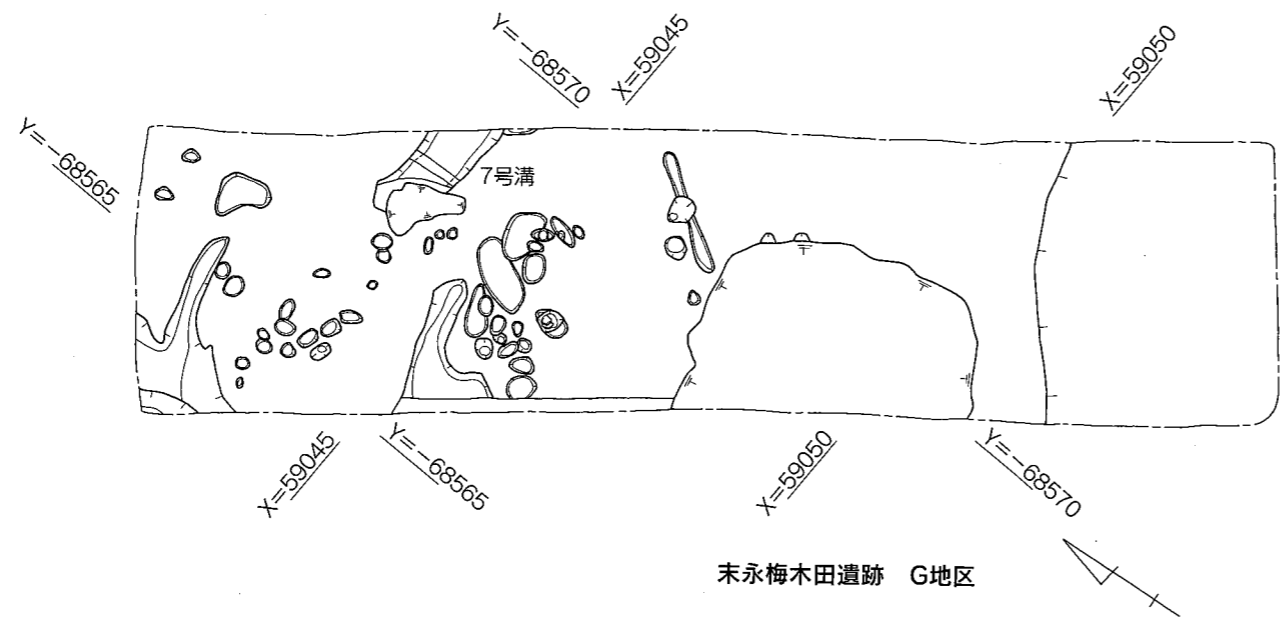
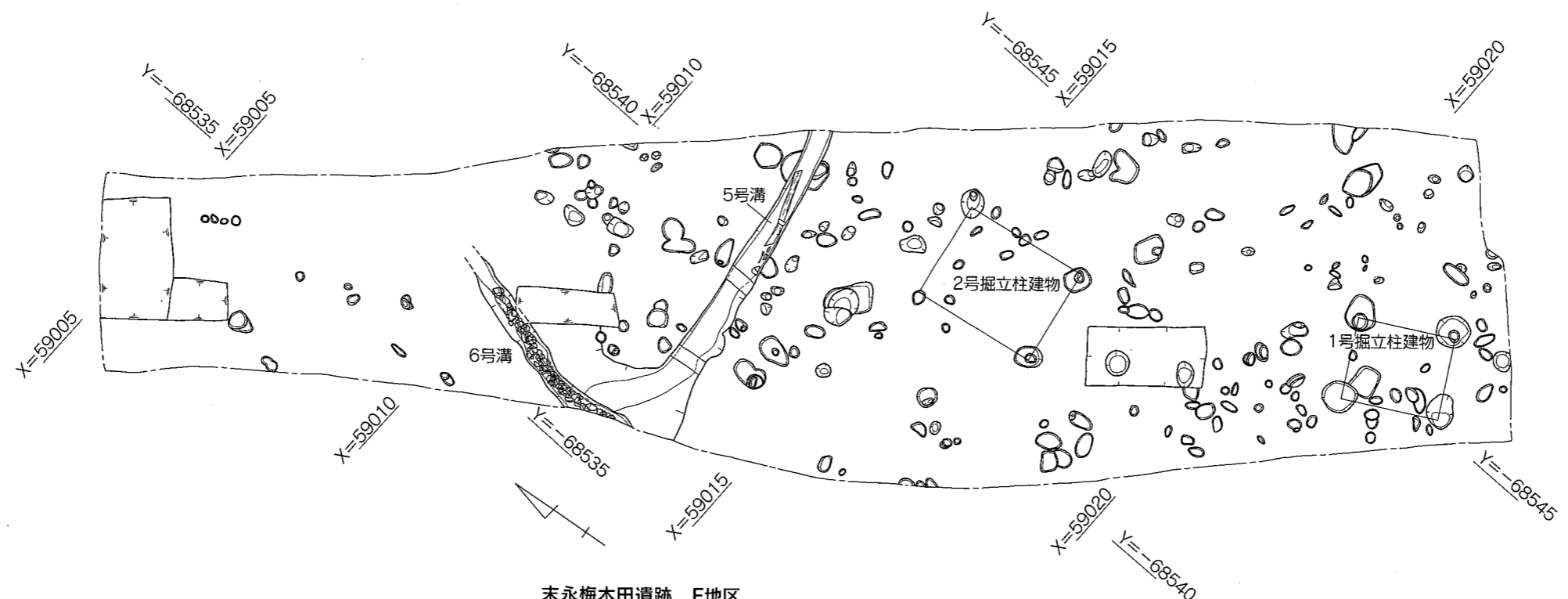
付図1 末永数蔵町遺跡 C地区 全体図(1/100)



付図2 末永数蔵町遺跡 D地区 全体図(1/100)



付図3 末永梅木田遺跡 E地区 全体図 (1/100)



付図4 末永梅木田遺跡 F・G地区 全体図(1/100)

